

書評

近藤和彦 著

『イギリス史10講』

(岩波書店、二〇一三年)

青木 康

二〇一三年一二月、近藤和彦著『イギリス史10講』が刊行された。同じ岩波新書の『●●史10講』シリーズの坂井榮八郎著『ドイツ史10講』(二〇〇三年)、柴田三千雄著『フランス史10講』(二〇〇六年)の刊行から数年以上を経ての待望久しい刊行であった。本書「あとがき」によると、同シリーズの企画は、一九九七年七月に開かれた英独仏各巻の執筆者と書店編集者の会合に始まったとされ、そこでは、各国史の「学問的にスタンダードな叙述と知的なおもしろさの結合こそ課題」であることが話し合われた(本書三〇五〜三〇六頁。以下、本書の参照箇所は、文中に該当頁数のみを挿入する形で示す)。しかし、イギリス、ドイツ、

史苑(第七五卷第一号)

あるいはフランスの歴史を専門的に研究する執筆者たちにとつて、この課題を新書の限られた紙幅のなかで達成するのは容易なことではなく、前述の会合でも、各著者の「力わざ」が必要ということになった。実際、イギリス史に関して、「イギリス●●史」のような対象の限定を付さない新書版の学術的な通史は、本書以外にはほとんど見あたらない。その意味で、著者の取組みは積極的に評価されるべきであり、評者も本書の刊行を心からよろこびたい。

本書の内容については、目次を「講」の下の階層まで示すことで、その概要、あるいは特徴的な点を知ることができ

第1講 イギリス史の始まり

1 イギリス史とは

2 自然環境と先史の人びと

第2講 ローマの属州から北海の王国へ

1 ローマの文明

2 部族国家、古英語、キリスト教

3 ノルマン複合のなかのイングランド王国

第3講 海峡をまたぐ王朝

1 ノルマン征服からアンジュー朝へ

近藤和彦著『イギリス史10講』（青木）

- 2 イングランドとウェールズ、スコットランド
- 3 百年戦争と黒死病

第4講 長い一六世紀

- 1 一五〇〇年ころの世界とイギリス
- 2 主権国家と国教会
- 3 女王の伝説、等
- 4 大ぶりたんや国ぜめし帝王

第5講 二つの国制革命

- 1 論争的な一七世紀
- 2 三王国戦争とピューリタン共和国
- 3 王制・国教会・議会の再建

第6講 財政軍事国家と啓蒙

- 1 長期変動のなかの一六——一八世紀
- 2 プロテスタント連合王国の政治文化
- 3 啓蒙、商業社会、モラル哲学

第7講 産業革命と近代世界

- 1 帝国と連合王国のかたち
- 2 促進された産業革命
- 3 一八〇〇年以後のイギリスと世界

第8講 大変貌のヴィクトリア時代

- 1 ステイツマンは豹変する
- 2 ヴィクトリア時代——近代の表象

- 3 パクス・ブリタニカと「東洋の英国」
- 4 国際問題、国内問題

第9講 帝国と大衆社会

- 1 世紀の転換
- 2 「大戦争」とイギリス
- 3 第二次世界大戦と福祉国家

第10講 現代のイギリス

- 1 脱植民地と多幸症
- 2 サッチャとブレア、その後のイギリス

あとがき
索引

ここに紹介した目次からは、本書のイギリス史論の特徴がはっきりと読みとれるであろう。まず、先史時代から現代までのイギリスの歴史が時代順に叙述されているが、「長い一六世紀」から現代にいたる五〇〇年あまりに、全一〇講のうち七講があてられ、明らかに近世以降が重視されている。その先陣をきるのが「第4講 長い一六世紀」で、その1は「一五〇〇年ころの世界とイギリス」と題されている。ちなみに、目次に「世界」という語が登場するのはここが最初であり、一六世紀は、「最初のグローバル化」の進んだ時期として注目されているのである。

この第一の特徴と深く関連して、本書では、各時代のイギリス史を叙述するにあたって、グレートブリテン島、あるいはブリテン諸島内に閉じた一国的な見方はとられない。本書では、その方針は徹底しており、本書の第1講「イギリス史の始まり」は、一般にイギリス史の始点とされることが多い紀元前一世紀半ばのカエサルの侵攻ではなく、現在のブリテン諸島にあたる場所がヨーロッパ大陸に連続していた、今から一万年前の氷期から、イギリス史を説き起こしている。それに続いて、紀元前一世紀から一〇六六年のノルマン征服までを概観する第2講は「ローマの属州から北海の王国へ」、ノルマン征服から四〇〇年あまりを扱う第3講は「海峡をまたぐ王朝」とそれぞれ題され、いづれにせよ、イギリス史の展開において、大陸とのつながりが決定的な重要性をもつ要素としてつねに意識されることになる。そして、前段で述べたように、近世以降は、極東の日本を含む広い世界との関係に、特に注意がはらわれる。イギリスの対外発展と産業革命の成功が一方的に強調されることの多い一七世紀末からの長い一八世紀を、本書では第6講「財政軍事国家と啓蒙」および第7講「産業革命と近代世界」がカバーするが、その結論は、「産業革命とは・・・、第6講で述べた年来の貿易赤字の解決である（一八六頁）」というもので、イギリスの一国的な成功

談とははっきりと趣を異にしている。

また、一般に、一国の通史では、章別構成が、目につきやすい国政の転換点Ⅱ王朝や君主・為政者の交替劇を年代順になぞったものになりがちであるが、本書の場合は、社会的、文化的要素を、(もちろん単なる「シャドウ・ヒストリ」としてではなく) 政治的事柄と密接に関連せざるをえないものとして、重視しようとする姿勢が目立っている。目次からそうした姿勢が特に強く感じられた部分を拾うとすると、第2講の2「部族国家、古英語、キリスト教」、第4講の4「大ぶりたんや国せめし帝王」、第6講の3「啓蒙、商業社会、モラル哲学」、第8講の2「ヴィクトリア時代―近代の表象」などを挙げるができるが、社会や文化を重視する姿勢は、それらの部分にとどまらず、本書を通じて一貫していると言える。

これらの特徴によって、本書は、二〇世紀後半以降の内外の歴史研究の新たな展開を反映した記述を提供することができた。いや、むしろ、イギリス史の流れに大きな影響をおよぼすこととなった種々の事件、制度、現象等について、近年有力となっている研究動向に積極的に向き合って叙述した結果、本書の上述の特徴が生じたと言った方がより正確かもしれない。

たとえば、本書は、一〇六六年から一二八〇年ころに及

ぶ時期を、「イギリスがヨーロッパ史の主要アクターの一人となり、またブリテン諸島のなかのアイデンティティという点でも重要なことが次から次へ生じ」た「長い一二世紀」（四五頁）ととらえることに積極的である。近世の前半の時期を本書がどのような観点から描こうとしているかという点、「皇帝カール五世やスペイン王フェリペ二世にならって、ぜひし帝王「IIジェイムズ一世」も、世界に冠たる『普遍君主』たらんとしたのだが、いずれも『複合／礫岩君主』としてのみ可能なことだった」（一九頁。「」内は評者の補い）という文章から明らかのように、複合君主制論や礫岩国家論が採用されている。さらに、一七世紀末から一世紀余りの時期の歴史は、財政軍事国家Ⅱ戦費が「関税、直接税、消費税、そして国債に支えられる、近代的な財政国家」（一五八頁）という枠組みによって説明される。本書の第6講は「財政軍事国家と啓蒙」と題され、財政軍事国家は本書の一八世紀イギリス理解のキーワードとなっているが、この用語が歴史研究者の語彙に含まれるようになってから、せいぜい四半世紀を経たにすぎない。

三

このように、本書は、近年の歴史研究の豊かな成果を十分に組み入れたイギリスの通史となっている。著者は、本

書出版のための最初の会合から十数年間、精力的に研究の幅を広げ、自身の狭義の専門から遠いものを含むイギリス史のさまざまな重要論点について新しい研究動向も咀嚼し、それを生かした、学術的に意味ある最新版の通史を広範な読者に提供することに成功したのである。イギリス史は、きわめて分厚い研究史を有する領域であり、それぞれの専門家でなければ十全に理解することも難しい複雑な論争が戦わされている点が少なくない。そのような学界状況を考えると、著者の努力と、その成果としての本書は、きわめて高く評価されるべきである。⁵⁾

ただ、そうした本書の成立事情は、歴史学の研究者とは限らない広範な読者を想定した新書版の通史としてはやや気になる叙述スタイルを、著者に強いたように思われる。ないものねだりのコメントとなることを恐れつつ、その点について正直な感想を述べたい。まず気になったのは、本文中に歴史研究者の名前が多数登場しているということであり、結果的に、本書の索引項目として拾われた人物のうち、三人に一人は研究者がしめることになった。通史といえ、各時代の国王や有力な政治家・軍人、経済界の大立者、著名な思想家等々が次々と現れ、そうした歴史上の人物の言動を追っていくなかで、歴史の流れが感得されるようにするといったスタイルが、まず思い浮かぶ。もちろん、

どんな人物のどのような言動が描かれるかによって、浮かび上がってくる歴史像は違ってくるのであり、その選択・配置・描写の巧拙が通史の出来を多分に左右することになるのであるが、いずれにせよ、歴史上の人物についての叙述が通史のなかでは大きな役割を演じている。ところが、本書の場合、索引にとられている、すなわちイギリス史の理解にとって重要と著者がみなしている人物の三分の一は研究者であつて、歴史上の人物が登場する機会が相対的に減つてしまつているのである。本書の本文に研究者が多数登場するのは研究史上の問題に關説するためであり、「イギリス史のさまざまな重要論点について新しい研究動向も咀嚼し」て叙述するといふ、前段で述べた本書の長所を明らかにする役割になつていふ。その意味で、研究者の頻出は、本書をより理解しやすくするという利点があると言えよう。ただ、歴史学の専門家以外の一般の読者を考えた場合、歴史研究者の名前が（多くの場合、やや唐突に、かつ簡潔な文章中に）挙げられたことによつて、本書の理解はどれほど深まるであろうか。その利点はあまり大きくはないと考へれば、その分、歴史上の人物の具体的な動きを少しでも多く描き、歴史の動きにより親しみをもたせることに、限られた紙数を用いるという選択もありえたように評者には感じられる。

新書版の通史としての本書の叙述のし方について、もう一点だけ感じたところを述べておきたい。本書は、繰り返し指摘したように、多くの論点について、近年の歴史学の新たな動きを受け止めた、歴史学の専門家であれば大いに興味をひかれる説明を与えてくれる。かつての進歩史観に立つた分かりやすい通説はもはや維持できないことは明白で、本書では学界の新しい知見を取り入れた叙述が随所に見られる。著者は一七世紀の部分で、そのことをもつとも明確に述べている（一一六―一一七頁）が、他の部分についても、かつての進歩史観の通説が批判され、新しい議論にとつてかわられてきているのは同様である。ただ、個々の論点によつて、通説批判の進み具合、その切り口や深さは異ならざるをえない。その結果として、かつての進歩史観に立つた通史的叙述がもつていた長い期間を通しての（本書で言うならば講をまたいでの）統一感といったものが、現代歴史学の多様な研究成果を踏まえた歴史叙述、そして、その優れた一例としての本書からは大幅に失われてしまつていふように思われる。

しかし、広範な読者に、イギリスの通史、つまり歴史の大きな流れを分かりやすく提示するという観点に立てば、各時代の変化とそれらを通じての統一性を体现する要素の存在がより強調されるということが、あつてもよいように

近藤和彦著『イギリス史10講』（青木）

思われる。イギリス史でそのような統一性をささえる要素はいろいろと考えることが可能で、本書のなかにも、あくまでもひとつの例ということであるが、⁽⁷⁾そうした観点から見て重要と思われる論点の糸口を見いだすことができる。名譽革命の説明のところには、次のような文章があった。

「王、貴族院、庶民院」の三要素からなる混合政体、中世末のフォーテスキュがとねえた「政治共同体と王による統治」が法制化されることになる。この国制の原則は、修正を加え比重を移しながら、今日まで継承されている。

（一四二頁）

この引用文にある混合政体論には、まさに変化と継続の両要素が含まれている。古代の歴史家ポリュビオスではないが、それを本書（少なくともその後半部）を貫くひとつの筋として強調して見せることで、時代の変化とともに、本書が描くイギリス史の流れにもっと統一性を感じさせることができたように思われる。

以上、本書の特長を確認・評価したうえで、その特長ゆえに、新書版のイギリス史の通史としては少し疑問に感じたい点を率直に述べさせていだいた。意をつくしきれていない憾みが残るが、本書が多くの人に読まれ理解されるこ

とを願って、本稿をとじたい。

註

(1) 本書は、二〇一四年三月の第三刷において種々の訂正が加えられているが、本評は、基本的には一三年一二月の第一刷によっている。

(2) 批評が本書を評価するにあたって、『●●史10講』シリーズのなかの一著として本書が書かれたという事実は重要であると考えているが、その一方で、著者が、本書と『フランス史10講』・『ドイツ史10講』の相違点も強く意識しており、「このような違いは、イギリス・フランス・ドイツの違いというより、著者の世代と歴史感覚の違いによるのではないか(五頁)」と述べている点も忘れるわけにはいかない。この問題は、著者自身による本書の註解論文、近藤和彦「註釈『イギリス史10講』(上)——または柴田史学との対話」、『立正大学大学院紀要・文学研究科』第三〇号(二〇一四年三月)でも論じられている。また、著者は、同論文の後半部分では、本書の第4講までの部分に関して、叙述を補い、割愛せざるをえなかった論拠を明らかにする作業に取り組んでいる(第5講以下については、同紀要の続号に掲載予定)。

(3) そのような限定を付した著作の近年の例としては、秋田茂著『イギリス帝国の歴史』(中公新書、二〇一二年)、川北稔『イギリス近代史講義』(講談社現代新書、二〇一〇年)など。

(4) 日本語で読めるイギリス史を通観した新書としては、訳書であるが、アンドレ・J・ブルド著(高山一彦・別枝達夫共訳)『改訂新版 英国史』(文庫クセジュ、一九七六年)が知られている。

(5) こうした評価が、専門が著者と近い評者だけのものではなく、

歴史学界で広く見られることの一つの傍証として、本書が、二〇一四年五月に刊行された『史学雑誌』第五号「二〇一三年の歴史学界 回顧と展望」の「総説」(小松久男氏執筆)や「歴史理論」(吉澤誠一郎氏執筆)でも高く評価されていたことを挙げておきたい。

(6) 著者自身、本書本文中に研究者を多く登場させつつも、典拠表示などができていない点を問題視して、前掲の「註釈『イギリス史10講』(上)——または柴田史学との対話」をすでに発表し、それに続く(下)の刊行を二〇一五年春に予定している。

(7) 本評の本文で言及した混合政体論の他にも、いろいろな論点がありうる。評者が挙げたいもうひとつの候補が、イギリスの自由(主義)の伝統である。著者は、フランス革命・ナポレオンとの戦いを首相として指導した小ピットを「自由主義者である」(二〇四頁)と断言するが、一般にイギリスの自由主義者の系譜に名を連ねるのは、一般にイギリスのフォックスであり、この興味深い食い違いは、イギリスの自由(主義)のとらえ方を、前後の時代にまで広げて、より長いスパンで考察する可能性を提起していると思われる。

(本学文学部教授)